

## 第76回「家の光文化賞」

# 受賞組合を訪ねて

「家の光文化賞」は、昭和24年に『家の光』創刊25周年記念事業として「農村文化の向上に特別顕著な成績をあげている農業協同組合を表彰し、その成果をあまねく農村に広め、農村文化向上への一助とする」ことを目的に制定されたものです。

以来75年間、延べ292組合を顕彰してきました。受賞組合は、それぞれの地域における農業協同組合の先駆的役割を果たしており、その活動はもとより「家の光文化賞」に対しても高く評価されております。

本年度、第76回「家の光文化賞」については、審査委員12名により、現地調査も含め、約3か月にわたる厳正な審査を実施した結果、2組合に決定しました。受賞した組合には、賞状ならびに正賞として屏風時計一基、副賞として賞金が贈られます。あわせて「ブラジル・コチア産業組合中央会記念賞」が贈られます。



令和8年2月

一般社団法人 家の光協会

### 第76回「家の光文化賞」審査委員

京都大学	研 究 員	石 田 正 昭
滋賀県立大学	名誉教授	増 田 佳 昭
摂南大学	特任教授	北 川 太 一
立正大学	教 授	北 原 克 宣
福岡大学	教 授	辰己 佳寿子
北海道大学大学院	准 教 授	小 林 国 之
全国農業協同組合中央会	常務理事	若 松 仁 嗣
全国農業協同組合連合会	代表理事専務	尾 本 英 樹
全国共済農業協同組合連合会	常務理事	近 藤 修 一
農林中央金庫	常務執行役員	川 島 憲 治
家の光協会	代表理事専務	木 下 春 雄
家の光協会	常務理事	真 鍋 勝 裕

### 令和7年度「家の光文化賞促進賞」選定委員

滋賀県立大学	名誉教授	増 田 佳 昭
摂南大学	特任教授	北 川 太 一
福岡大学	教 授	辰己 佳寿子
家の光協会	代表理事専務	木 下 春 雄
家の光協会	常務理事	真 鍋 勝 裕



# 第 76 回「家の光文化賞」審査委員長審査講評

三重大学名誉教授 京都大学研究員 石田正昭

「家の光文化賞」は『家の光』創刊 25 周年記念事業として創設され、昭和 25 (1950) 年 5 月 24 日第 1 回受賞組合表彰式が新築された家の光協会講堂で開かれた。当時、全国の総合農協数は約 1 万 3,000 であったが、応募は 36 府県、39 農協にのぼった。今では想像できないほど多くの応募があったが、そのなかから栄えある受賞組合に 5 農協が選ばれた。

それから 75 年、『家の光』創刊 100 周年を迎えた今年度、より多くの応募を期待して「家の光文化賞」の応募要件が次のように変更された。

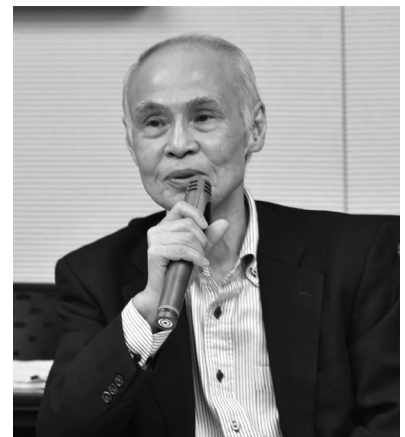
第 1 に、農協運営において「J A 教育文化活動基本方針が明確に位置づけられていること」が明記された。第 2 に、満たすべき『家の光』の普及条件として、従来の「正組合員戸数に対する普及率 30 %」のほかに、またはというかたちで「総組合員戸数に対する普及率 8 %」が加えられた。第 3 に、過去の受賞農協も文化賞に再応募できるようになった。再応募は「総組合員戸数に対する普及率の要件を満たし、応募年度の前々年度から『家の光』年度累計部数が減少していないこと」を条件に、「文化賞受賞時から 5 年を経過していること」が明記された。

広域合併の進展や組合員構成の変化などをふまえ、応募しやすい環境を整えたことになるが、これを機に教育文化活動のよりいっそうの深化と、より多くの農協が家の光文化賞に応募してほしいと願っている。

さて、令和 7 年度の第 76 回「家の光文化賞」には、滋賀県・甲賀農業協同組合（J A こうか）と熊本県・八代地域農業協同組合（J A やつしろ）の応募があった。

12 名の委員からなる第 1 回審査委員会は令和 7 (2025) 年 10 月 29 日に開催され、応募書類に基づいて厳正に審査した結果、両農協ともに受賞候補組合にふさわしいことが確認され、現地調査に進むことが承認された。

現地調査は、J A こうかは増田佳昭・木下春雄委員、J A やつしろは北原克宣・真鍋勝裕委員によって実施され、12 月 10 日の第 2 回審査委員会で現地調査結果の報告と最終審査が行われた。



## 「協同組合の原点を確認し、協同組合らしい運営に立ち返る」ことをめざすＪＡこうか

ＪＡこうかは、合併前の旧農協を含めて、家の光文化賞を過去４回受賞している教育文化活動に熱心な組合である。直近の受賞（第５１回、平成１２年度）は合併後の甲賀郡農業協同組合（名称変更により現在は甲賀農業協同組合）によるものであり、過去の受賞組合が再応募する最初のケースとなった。

審査委員会で高く評価された第１の点は、令和２（２０２０）年度を「教育文化活動元年」と位置づけ「教育文化活動基本方針」を定めるとともに、令和５（２０２３）年４月に「教育文化事業部」と「教育文化活動推進委員会」を立ち上げ、組合員・役職員が一体となった推進体制を整えたことである。このタイムラグはコロナ禍によるものである。

ここで「教育文化事業部」と命名したのは、事業部とすることで目標管理を徹底することをめざしたからである。とくに組合員の加入、食育活動の開催、『ちゃぐりん』配布による読者感想文の応募などで、事業部とした成果が現れた。また、専務直轄（現在は専務不在のため総務担当常務所轄）の部署としたことによって、他の部署や子会社・関連会社との連携も円滑に進められるようになった。

審査委員会で高く評価された第２の点は、水田地帯での新たな農業所得確保をめざして、「多様な担い手が選択できるメニューづくり」をスローガンに、「新たなこうか型園芸産地づくり」として、野菜、果樹、花きの生産振興に取り組んでいることである。とくにブランド品「忍野菜」シリーズの開発や、歌川広重の『東海道五十三次』にも描かれた「水口かんぴょう」の再興に注目が集まった。これらの取り組みは組合員・利用者による農産物直売所「花野果市」などの高い利用に結びついている。

審査委員会で高く評価された第３の点は、教育文化事業部の設置とも関連するが、組合員の参加・参画と組合員組織の拡充を実現していることである。組合員や女性部員の拡大、女性役員の積極的な登用、地区運営委員会・地区ふれあい委員会の設置はもとより、集落営農の次世代メンバーの研修組織として「地域営農組織次世代部会」を設立したこと、将来を見据えた女性部の組織改編を行ったことに注目が集まった。女性部では支部組織を解消したうえで、全体活動（本部活動）と２０余の倶楽部活動（自主的なサークル活動）からなる活動主体の女性組織に再編された。



ＪＡこうかの現地調査を報告する  
**増田 佳昭** 審査委員

## 「産地型農協として営農関連事業と教育文化活動を有機的に結びつけている」ＪＡやつしろ

ＪＡやつしろは日本一のトマト産地である。「トマト・トマト」の連続栽培が行われている。このような産地型農協が、営農関連事業と教育文化活動を有機的に結びつけていることが審査委員会では高く評価された。

ＪＡやつしろは、合併前の旧金剛農協が第６回家の光文化賞を昭和３０（１９５５）年に受賞しているが、それ以来の受賞となる。ＪＡやつしろとしては、令和２（２０２０）年度に「家の光文化賞促進賞」を受賞しているが、その際に指摘のあった改善事項をほぼ達成しており、今回の文化賞受賞につながった。

審査委員会で高く評価された第１の点は、産地を支える人材育成の仕組みがしっかり備わっていることである。トマトのほか、い草、イチゴ、メロン、ブロッコリーなど多彩な園芸作物が生産されているが、毎年、営農指導員には「マイプラン」、販売担当者には「Myチャレンジ」と名づけられた研究発表機会が設けられている。すでに２０年以上の歴史がある。

係長以下の営農指導員（およそ２５名）、販売担当者（およそ５０名）には自ら定めた研究論文を提出することが義務づけられ、１次選考を通過した優秀作品は、生産部会や青壮年部、女性部の代表者たちが参加する研究発表会で優劣が競われる。どの論文も分析的な内容であり、毎年製本される論文集はあたかも学会発表論文集のような趣を呈している。

審査委員会で高く評価された第２の点は、一般の女性部とは別に、トマト選果場利用組合をベースとする生産部会にも女性部があり、「やつしろブランド」の普及をめざした活動が展開されていることである。トマト選果場部会の女性部においては、消費地に出向いてのＰＲ活動、規格外品を利用した加工品（トマトピューレ、トマトケチャップ、ドライトマトなど）やレシピの開発、食育活動の地域展開などが行われていることに注目が集まった。このことは集出荷場を単なる共選施設から販売促進、加工、食育活動の拠点に飛躍させたことを表している。

一般の女性部と生産部会の女性部は背反するものではなく、生産部会の女性部員の多くは一般の女性部にも加入している。その一般の女性部では『家の光』の記事活用が積極的に展開されている。



ＪＡやつしろの現地調査を報告する  
北原 克宣 審査委員



第2回審査委員会では、以上の議論をふまえて、ＪＡこうか、ＪＡやつしろはともに「家の光文化賞」受賞農協にふさわしいことを全会一致で決定した。

最後に、審査委員長として両農協に共通する重要事項を述べて結びとしたい。1つは教育文化活動の展開にあたって、職員教育のレベルアップが欠かせないということである。ここではふれなかったが、ＪＡこうかの池村正代表理事組合長は、総合農協の職員育成はどうあるべきかを長年にわたって追求してきた経緯がある。また、ＪＡやつしろは「マイプラン」「Myチャレンジ」という自己啓発プログラムに見られるように、組合員から信頼される職員の育成に努めてきた経緯がある。

もう1つは、教育文化活動の活性化にあたり、組合員組織について「組織があって活動がある」という＜メンバーシップモデル＞では、将来の発展は見込めないということである。ＪＡこうかの女性部やＪＡやつしろの生産部会女性部に見られるように、「活動があって組織がある」という＜ユーザーシップモデル＞への転換を進めていくことが必要である。

## 令和7年度 「家の光文化賞促進賞」 受賞組合

「ＪＡ教育文化活動が、ＪＡ運営の中に位置づけられ、総合的に取り組む姿勢が見られるＪＡを顕彰する」ことを目的とした「家の光文化賞促進賞」の審査もあわせて行われ、2ＪＡが決定しました。受賞ＪＡには賞状のほか副賞として賞金が贈られます。

秋田県

**秋田やまもと農業協同組合**



代表理事組合長  
**竹内 孝一**

鹿児島県

**そお鹿児島農業協同組合**



代表理事組合長  
**竹内 和久**

## 教育文化を J A 運営の柱に

報告者 滋賀県立大学 名誉教授 増田 佳昭

### 農業振興を軸に地域社会と共生する J A

滋賀県の南東部に位置する J A こうかは、昭和 53 年、水口町、土山町、甲賀、甲南、信楽の農業協同組合が合併して甲賀郡農業協同組合を設立、その後甲西町、石部町の両農協が合流し、平成 21 年 4 月 1 日に名称を「甲賀農業協同組合（愛称：J A こうか）」に変更して現在に至っている。旧甲賀郡全域をエリアとする農村地域の J A である。

管内の総面積 5 万 5 千 ha のうち耕地面積は約 5 千 4 百 ha、農地の 9 割以上が水田である。よく知られる甲賀忍者の里である。J A では、農業所得拡大をめざして新たな「こうか型園芸産地づくり」を打ち出し、白ネギ、玉ねぎ、キャベツの露地野菜、さらには果樹の生産拡大に取り組んで、着実に成果を上げている。

商品名にも工夫をこらし、忍（しのび）シリーズとして、忍葱（しのぶねぎ）、忍玉真丸（にんたままんまる、玉ねぎ）、忍忍人参（にんにんにんじん）などを開発、東海道五十三次・水口宿に描かれた「水口かんぴょう」や「杉谷なすび」「杉谷とうがらし」「下田なす」「鮎河菜（あいがな）」など伝統野菜の振興にも取り組んでいる。米については、令和元年に全量買取方式とした。インボイス制度で他の J A が委託販売方式に戻すなか、全量買取を継続している。

J A の事業は、販売品 37 億円、購買品 14 億円、貯金 1,756 億円、貸出金 257 億円、長期共済保有 3,931 億円（いずれも令和 6 年度実績）であった。同年度の事業総利益は 30.0 億円、うち信用事業 11.9 億円、共済事業 8.0 億円、販売事業 3.3 億円、購買事業 2.6 億円、当期剰余金は 2.6 億円であった。

J A の職員数は正職員 220 名（うち女性 78 名）、臨時・パートが 82 名、合計 302 名である。合併前の行政区域をもとに、6 つの地区統括支所がおかれ、営農経済センターも同じエリア区分で 6 か所設置されている。

特徴的なのは、J A の多面的な事業展開である。青果物市場の機能を持つ青果センター、茶の取引



左上から右回りに「忍葱（しのぶねぎ）」「水口かんぴょう」「杉谷とうがらし」「下田なす」

も行う茶加工センターがあり、農産物直売店として花野果市（はなやかいち）水口店、同貴生川店、同石部店、ここぴあ（直売店舗、指定管理施設）がある。ＪＡの子会社として、給食・弁当等の調理販売を行う㈱初穂、自動車の販売、修理等を行う㈱ＪＡオートパルこうか、そして介護福祉事業、労働者派遣事業等を行う㈱ＪＡゆうハートがあり、さらに関連会社として甲賀協同ガス㈱（ガス供給）、(有)アグリ甲賀（農産物の生産加工販売、農作業受託）、㈱あいコムこうか（電気通信、放送等）がある。

㈱ＪＡゆうハートは、甲南地区にデイサービスセンター、ヘルパーステーション、ケアプランセンターを置いて介護事業を展開、従業員数は派遣部門 130 名、介護部門 140 名を数え、ＪＡブランドへの信頼感もあって地域福祉の拠点として、重要な地位を占めている。㈱初穂はＪＡゆうハート等に給食を供給するほか、地元生協コープしがに宅配弁当の供給をしている。ＪＡ本体は営農と信用共済が中心だが、グループ会社とともに、地域社会のくらしのインフラを担っている。



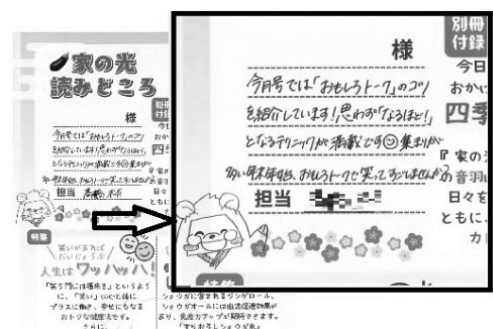
デイサービスセンターには、従業員の負担を軽減するリフトなどが導入されている

## 教育をＪＡ運営の軸に

### —— 教育文化活動基本方針の策定と教育文化事業部の設置 ——

ＪＡは、令和２年を「教育文化活動元年」と位置づけて、本格的に取り組み始めた。同年には「教育文化活動基本方針」を定め、５年にはそれを担当、推進する部署として「教育文化事業部」を設置した。全国的にも珍しい「教育文化」の名を冠した部署を設置したのは、基本方針をスローガンに終わらせず、その実行部隊を職員にも組合員にも「見える」かたちで示そうとするものだった。そして、今回の家の光文化賞への挑戦も、あらためて協同組合運動の原点を確認して、そこに立ち返るためのＪＡのチャレンジ（池村正組合長）と位置づけた。教育文化事業部は専務直轄部署との位置づけで、現在 7 名体制。「事業部」なので、目標数値も持って活動する。組合員加入の促進では令和 5 年に 131 人、6 年 272 人、7 年（11 月末）245 人の純増を達成した。

教育文化重視の姿勢は、今に始まったことではない。そこには池村組合長の「人づくり」へのこだわりがある。組合長は教育人事部在任中に専門分野に特化しないオールマイティーな職員を育成するための若手職員の勉強会「かふか塾」を開始、総務部長時代には職員が組合員との対話の引き出しを増やせるようにと、農業新聞の注目記事の見出しと切り抜きを添付した報告書「日本農業新聞を読んで」



職員が『家の光』を配本する際は、手書きのメッセージを書き加えた「読みどころ」を添えている



の提出制度を実施してきた。

令和6年度からは、所属長を対象とした「『家の光』魅力再発見研修会」、さらにこの研修会を起点として各部署で「『家の光』魅力発信研修会」を実施し、職員の知識と発信力の向上を図っている。

また組合員後継者の人づくりも大事と、組合員の学習の機会として令和元年度に「協同組合塾『忍(しのび) ☆あすてる』」を開設、3年コースで60数人が修了した。令和5年度にはこれを改組して、集落営農の次世代メンバーの研修を目的に「地域営農組織次世代部会」を発足させた。この会には、現在50代から60代を中心に約50名が参加、地域を越えた情報交換と仲間づくり、実践交流や視察研修などの勉強会を行っている。



非常勤理事による小学校での出前授業「ふるさとの農業授業」

地域の小学5年生に『ちゃぐりん』を贈呈しているが、感想文の応募は269名あり、うち13名が「『ちゃぐりん』感想文コンクール」で入賞した。令和6年度からは食農教育の一環としてJAの非常勤理事が出前授業で教壇に立ち、地域の農業や特産物、JAの活動などを伝える「ふるさとの農業授業」を行っている。

新加入組合員向けの学習機会としてはJAの施設の視察や体験、意見交換などを行う「こうか知っとくツ

アー」を実施している。最近では直売所や葬祭センターの視察を行った。

さらに、JAへの意思反映のための「運営委員会」と、組合員活動を行う「ふれあい委員会」が地区別に設置されているが、興味深いのは「運営委員会」の開催方法である。運営委員会は地区担当理事、農業改良組合長、総代代表などで構成されるが、みな意見が述べられるように「ワークショップ方式」で実施。地区が抱える問題について活発な議論がなされ、出された課題はふれあい委員会のイベント企画や地区内での各種活動につなげられる。



運営委員会では『家の光』連載「楽しく学ぶ JA共育ドリル」を活用して、グループディスカッションを行った

## 活発に活動する女性部

JAの女性部活動も意気軒昂である。合併以前には女性部支部が支所ごとにあったが、地域婦人会の解散とともに女性部支部も解散、部員数は減少の一途をたどった。そこで女性部組織を抜本的に改革、全体（本部）活動と自主的な「倶楽部活動」の二本立てとした。旧来のピラミッド型組織から自主的なサークル活動の集合体へと女性部組織のかたちを変えたのである。全体活動では、年2回の旅

行を企画、開催。今年度は大阪・関西万博旅行を実施してバス 2 台の予約が 1 日で埋まり、それをきっかけに 14 名が女性部に加入した。毎年、女性フェスティバル&家の光大会として、倶楽部発表、作品展示、記念講演、『ちゃぐりん』感想文表彰などを行っている。

倶楽部活動は、ウォーキング、フラワーアレンジメント、カラオケ、絵手紙、家庭菜園、フラダンスなど 20 以上のグループがある。土山支所で活動するハンドメイドグループは、支所の玄関に季節ごとのディスプレイを行って来店者を楽しませている。JA 理事でもある上田和子女性部長は、いくつかのグループの講師もつとめて大活躍だが、最近になって新たに「近江の文化財を学ぶ」倶楽部を立ち上げた。

さらに、子育て世代に参加してもらおうと、フレッシュミズ組織を立ち上げて家の光料理教室を開催、梅干し作りや味噌作りなどをテーマに年 4 回程度実施。この活動は JA 全国女性協議会からも表彰された。こうしたさまざまな活動の結果、女性部員数も令和 4 年度の 455 人から 6 年度には 745 人に増加した。



土山支所の玄関を飾る『家の光』記事活用作品やリメイクされた着物などのディスプレイ

JA こうかは、組合長のリーダーシップのもと、「人づくり」と協同組合としての「つながり」を大事にしながら、地域と共生する JA として着実に発展している。今後も引き続き発展を期待したい。

## 滋賀県 甲賀農業協同組合

### JA データ

正組合員	5,441 名
准組合員 (法人除く)	11,696 名

### 普及状況 令和 8 年 2 月号

『家の光』	1,255 部
『地上』	106 部
『ちゃぐりん』	133 部



代表理事組合長  
池村 正



女性部  
部長 上田 和子

# 産地を支える人づくりと J A ファンづくり

立正大学 教授 北原 克宣

## はじめに

2025 年 8 月 10 日から 11 日にかけて熊本県を襲った記録的な大雨は、広い範囲に浸水等の被害をもたらした。J A やつしろ管内も、3,000 を超える家屋が浸水等による物的被害を受け、い草の苗床は 9 割が浸水したほかトマトやイチゴなど園芸作物も被害を受けた。

11 月初旬に訪問した東部総合支所も浸水被害を受け閉鎖していたが、偶然にも訪問日は支所の再開日でもあった。再開まで 3 か月を要したことに被害の大きさを思い知った。



昨年 8 月の大雨で、い草の圃場への浸水で茶色に枯れる被害が生じた

## 園芸産地化を進めた農協の役割

J A やつしろは、事業総利益 38 億 6 千万円の 5 割超を販売事業と購買事業が占め、組合員 9,672 (団体 135 含む) の 6 割超が正組合員という農業を中心とした産地型農協である。販売取扱高 314 億円のうち青果物が 270 億円を占め、「はちべえトマト」としてブランド化に成功したトマトは 123 億円を取り扱っている。

本所のある八代市は、江戸時代から続く干拓地で八代平野の 3 分の 2 は干拓地と言われている。管内を流れる球磨川の豊富な水に恵まれていたことからい草の栽培に適しており、平野部では「水稻＋い



J A やつしろ本所は、新幹線の新八代駅（右奥）のほど近くに立地する

草」の作付体系が一般的であった。とりわけ、戦後復興期から高度経済成長期にかけて住宅建設が増加する中で畳の需要が高まりい草の作付も増加した。熊本県全体でみると、1960 年には 1,340 ヘクタールだった作付面積は 1972 年には 6,250 ヘクタールまで増加し、その後、増減を繰り返しながら



1989年の6,630ヘクタールをピークに急減した。1989年以降、中国からの畳表の輸入が急増した影響で2000年に1,425あった栽培農家は2023年には248まで減少している。

そこで、い草産地から園芸産地への転換がすすめられてきたが、それには農協が大きな役割を果たした。ひとつは、施設園芸を普及するための補助金の利用である。施設の設置を農協が行い、リース方式にて貸し出すことで農家側の負担をリース料のみとし、減価償却を終えた施設は農家に譲渡することで初期投資の軽減につなげている。

2つめが選果場の導入と集出荷施設利用組合の組織化である。選果場の導入は生産者の規模拡大を促し、国内有数のトマト産地であった八代をさらに発展させ、組織化は生産者へ自主的な選果場運営によるコスト削減と積極的な販



管内は冬春トマトの産地。中央トマト選果場は1998年に設置され、利用組合のメンバーみずからが運営する



トマト加工所で作るドライトマトとトマトケチャップが人気を博している

売活動をもたらした。なかでも2000年に発足したトマト選荷場利用組合女性部は、消費地での対面販売やPR活動、規格外品を利用した加工品開発にも寄与、レシピの開発、食育活動などの役割を担ってもらうことで「はちべえトマト」ブランドの確立に大きく貢献した。約70人の女性部員の存在は、集出荷施設を単なる共選施設から販売促進、加工、食農活動の拠点に飛躍させたと言え、JA女性部とも連携し女性組織全体の活性化につながった。

この女性部と連携した加工品は商品化され、同JAで設けた加工所で、「はちべえドライトマト」「はちべえトマトケチャップ」として製造しており人気を博している。

支所の役割にも触れておきたい。視察で訪れた西部総合支所は、広い敷地を囲むように営農センター、購買センター、総合支所（金融・共済店舗）、トマトや野菜の集出荷施設、農産加工施設が一箇所にまとめられている。合併後の支所再編の際に実現したものであるが、支所機能や施設が充実していることは組合員にとっても利便性が高く、産地を支えるうえで重要な役割を果たしている。



西部には、選果場と同じ敷地内に3つのJA施設がある。左から営農センター、購買センター、総合支所

## 産地を支える人材づくりー「マイプラン」と「Myチャレンジ」ー

産地として高いレベルを維持し続けるには、農協職員のレベルアップも欠かせない。この点で、





営農指導員による「マイプラン」成果発表会。  
論文は冊子にまとめられている

J A やつしろには他の農協の見本となる取り組みがある。営農指導員による「マイプラン」、販売担当者による「My チャレンジ」である。係長以下、営農指導員、販売担当者全員がみずからの問題意識にもとづいて研究を進め、その成果を論文形式で取りまとめるもので、すでに20年以上の蓄積がある。報告書は「マイプラン」100ページ、「My チャレンジ」120ページの大部なもので、そのレベルの高さにも驚かされる。

J A の特徴的な取り組みとも関係するのでひとつだけ紹介すると、やつしろではJ A コネクトという Kamakura Industries 株式会社が開発したJ A 向けアプリを導入している。職員間ではすでに会議の連絡や情報交換などに利用されているが、組合員とのやり取りはまだ一部に限られている。キャベツの販売担当者が取り組んだ研究は、このJ A コネクトの効果を検証したものである。

同アプリを用いて部会員に市況や営農情報を発信するようにしたところ、市況が部会員に伝わりやすくなった、市場からの急な注文にもまとまった量を集めやすく有利販売につながった、栽培技術の向上につながった等の効果があったことが報告されている。

担当者みずからが現場で抱いた問題意識を研究につなげ、その成果を日々の仕事に生かす取り組みが職員の専門性を高め産地を下支えしているのである。

尚、同J A ではJ A コネクトを活用したD X 化を進めており、販売業務の効率化も図られていることも付け加えておく。

## 地域に根づく『家の光』の文化と活動

2025 年度から始まる「活動総合3カ年計画」では、重点実施項目の2番目に「暮らし・地域活性化戦略」が位置づけられている。具体的な取り組み目標は大きく3つに分けられるが、教育文化活動は2つである。1つは、「教育文化活動を通したJ A ファンづくり」であり、①J A やつしろフェア（各支所の感謝祭）への店舗の出店や地域住民参加型の展示会の実施、②『家の光』の記事活用、③ちゃぐりんフェスタ・アグリキッズスクールの開催、④地域清掃活動「クリーン作戦」の実施などに取り組むとしている。

もう1つは、「スマートフォンを利用したデジタル化」であり、①スマートフォン活用講座の開催、②J A コネクトの利用者拡大と利便性向上、③共済WEBマイページ、J A バンクアプリの登録者数の増加などである。

昨年4月に策定された「教育文化活動基本方針」では、「組合員・地域住民・役職員が一体となり

教育活動を実践し・・・組合員・地域住民の『暮らしの願い』を叶え、『幸せづくり』を実現する」活動を展開することを謳っている。2010年の合併後から、女性部の組織活動はじめ「暮らしの活動」として取り組まれてきたものも多くあるが、教育文化活動が体系的に位置づけられることになった。

「JAやつしろの女性部員は農協愛・地元愛が強い」。女性部長の喜多川さんの言葉である。元々い草栽培が盛んだったことと無関係ではないようで、い草の製織作業を行う小屋には『家の光』が置かれていることが多く、作業を担う女性は、休憩の合間に『家の光』を手に取り目を通すことが多かったという。作業の疲れを癒やす読み物として『家の光』があり、生活の一部となることで意識せずとも農協が身近な存在になっていたのだろう。



西部総合支所の玄関を入ると『家の光』記事活用の作品がズラリと並ぶ。女性部の喜多川部長が中心になって展示を行い、女性部活動のPRにもなっている

西部総合支所の玄関口には、「米袋バッグ」「デイジーのリース」「オニヤンマのお守り」など記事を利用して制作された作品が並べられ、金融店舗内の幼児用スペースには『ちゃぐりん』とその記事を利用して作ったおもちゃが用意されていた。たしかに女性部のみなさんの「農協愛・地元愛」があふれていた。

## おわりに

「生活は低く、事業は高く／土作り、人造り、物を創れ」。役員室隣の会議室に掲げられた墨書は、干拓事業に携わり入植農家の生活の向上に腐心した地元の農聖・松田喜一の教えである。

8月の豪雨の際、農協では直後の8月12日から被害状況の調査をはじめ、い草の苗場や苗の確保、トマトやイチゴの苗の確保、土壌消毒、残渣処理等に奔走し、生産資材の代金決済を遅らせるなど資金面での支援対策も講じた。

農家と苦楽を共にし、みずからも決して豊かとは言えない生活を送った松田の精神は、JAやつしろに引き継がれている。

## 熊本県 八代地域農業協同組合

### JAデータ

正組合員	5,851 名
准組合員	3,686 名

### 普及状況 令和8年2月号

『家の光』	693 部
『地上』	44 部
『ちゃぐりん』	44 部



代表理事組合長  
山住 昭二



女性部  
部長 喜多川 容紫子



青壮年部  
部長 永田 義博

# 家の光文化賞促進賞受賞農協一覧表

年度	都道府県名	農業協同組合名	年度	都道府県名	農業協同組合名
平成13年度	埼玉県	くまがや	平成22年度	群馬県	北群渋川
	滋賀県	東びわこ		神奈川県	セレサ川崎
平成14年度	福島県	新ふくしま		石川県	小松市
	岐阜県	東美濃		愛知県	あいち尾東
	京都府	京都やましろ		愛知県	西三河
平成15年度	岩手県	岩手中央		大阪府	北河内
	新潟県	えちご上越		島根県	くにびき
	三重県	伊賀北部		高知県	四万十
	鳥取県	鳥取中央	平成23年度	秋田県	秋田しんせい
	広島県	庄原		愛知県	あいち三河
	香川県	香川県		三重県	伊賀南部
平成16年度	埼玉県	いるま野		福岡県	筑前あさくら
	静岡県	伊豆の国		長崎県	壱岐市
	和歌山県	紀南		宮崎県	宮崎中央
	島根県	雲南	平成24年度	東京都	東京むさし
	熊本県	球磨地域		静岡県	とびあ浜松
平成17年度	栃木県	はが野		愛知県	なごや
	佐賀県	佐城	平成25年度	岐阜県	西美濃
平成18年度	秋田県	秋田おぼこ		愛知県	尾張中央
	広島県	福山市		京都府	京都丹の国
	山口県	あぶらんど萩		島根県	石見銀山
	福岡県	福岡市	平成26年度	福島県	白河
	熊本県	熊本宇城		神奈川県	相模原市
	熊本県	あしきた		石川県	白山
	宮崎県	はまゆう		愛知県	ひまわり
平成19年度	福島県	会津みなみ		島根県	西いわみ
	京都府	京都市		宮崎県	えびの市
	大阪府	大阪南	平成27年度	宮城県	加美よつば
	広島県	尾道市		東京都	東京中央
	長崎県	長崎県央		神奈川県	さがみ
平成20年度	福島県	たむら		滋賀県	栗東市
	東京都	東京あおば	平成28年度	千葉県	市川市
	京都府	京都		広島県	広島市
	島根県	いわみ中央		広島県	佐伯中央
	熊本県	菊池地域		鹿児島県	かごしま中央
平成21年度	埼玉県	さいたま	平成29年度	宮城県	みやぎ仙南
	神奈川県	厚木市		三重県	松阪
	静岡県	御殿場		大阪府	大阪中河内
	愛知県	あいち海部		大分県	べっぷ日出
	愛知県	愛知東	平成30年度	神奈川県	神奈川つくい
	大阪府	大阪市	令和元年度	三重県	伊賀ふるさと
	広島県	広島北部		鳥取県	鳥取いなば
	徳島県	板野郡		福岡県	福岡八女
	愛媛県	東宇和		福岡県	南筑後
	宮崎県	延岡	令和2年度	熊本県	八代地域
※農業協同組合名は受賞時の組合名			令和4年度	京都府	京都中央
			令和5年度	岐阜県	飛騨
			令和6年度	鹿児島県	南さつま
			令和7年度	秋田県	秋田やまもと
				鹿児島県	そお鹿児島

# 家の光文化賞受賞組合一覧

都道府県名	農 業 協 同 組 合 名
北海道	女満別町(1)、ようてい[留寿都村(3)]、きたみらい[訓子府町(5)]、道北なよろ[風連(7)]、いわみざわ[大富(10)・岩見沢市(19)]、新篠津村(11)、峰延(13)、美瑛町(14)、芽室町(16)、あさひかわ[旭川市神居(17)]、釧川(18)、南幌町(20)、道央[江別市(26)]、ふらの[中富良野(28)]、そらち南[栗山町(31)]、土幌町(59)
青森	八戸[田子町(28)]
岩手	花巻(62)[湯口村(1)・湯本(6)・北上市(26)・花巻市(46)・花巻(54)]、岩手中央(61)[太田村(5)・岩手紫波町(41)・岩手中央(55)]、岩手ふるさと[金ヶ崎町(16)]、いわて平泉[一関市(17)・花泉町(20)]、新岩手[玉山村(29)]
宮城	新みやぎ[志波姫村(15)・小牛田町(27)・鹿島台町(42)・みどりの(49)・あさひな(50)・栗っこ(53)]、みやぎ仙南(69)[角田市(18)]、加美よつば(68)
秋田	秋田しんせい(66)[西目村(2)・小出(9)・金浦町(10)・上郷(25)・仁賀保町(28)]、秋田おぼこ(58)[千屋村(5)・高梨(23)]、秋田なまはげ[大正寺(26)]、あきた北(58)
山形	庄内みどり[中平田(6)]、山形[本沢村(8)]、山形おきたま[上郷(14)・白鷹町(23)]、庄内たがわ[立川町(19)・新余目(44)]、鶴岡市(31)
福島	会津よつば[駒形(12)・金上(13)・会津坂下町(32)・猪苗代町(38)]、ふくしま未来[北福島(43)・新ふくしま(54)・新ふくしま(61)]、福島さくら[たむら(60)]
栃木	上都賀[今市地区(22)]、宇都宮[宇都宮市(28)]
群馬	前橋市[荒砥村(2)・前橋市(51)]
埼玉	いるま野(58)[入間市(23)・狭山市(25)]、さいたま(73)[さいたま(66)]
千葉	成田市[豊住(9)]、市川市(70)
東京	東京むさし(65)、マインズ(75)
神奈川	横浜[横浜北(24)・横浜南(42)・横浜(55)]、秦野市(25)、厚木市(62)、セレサ川崎(64)、さがみ(68)、相模原市(73)
山梨	南アルプス市[桃園(12)]
長野	みなみ信州[市田村(1)・飯田中央(39)・信州いいだ(47)]、大北(25)[北城村(3)・池田町会染(17)]、上伊那[美篤(11)・伊南(36)・伊那(41)]、ながの[飯山市太田(13)・山ノ内町平穂(30)・北信州みゆき(52)]、あづみ[烏川(14)]、松本ハイランド(55)[松本平(34)]
新潟	佐渡[新穂村(3)]、新潟かがやき[吉田町(29)]
富山	あおば[熊野村(3)]、いなば[松沢(4)]、となみ野[井波町山野(8)・鷹栖(11)・福野町(40)・砺波市(45)]、なんと[北野(9)]、みな穂[上原(10)・入善町(25)]、アルプス[立山町(21)]、福光[福光町中央(27)]、高岡市(57)[高岡市(36)]
石川	能登わかば[滝尾村(4)]、野々市[富奥(8)]、小松市(65)
福井	福井県[社(13)・上中町(14)・鯖江市(22)・福井市(27)・三国町(30)・大野市(38)・福井市(52)]
岐阜	越前たけふ[武生市(33)]
静岡	めぐみの[蘇原(14)・可児(45)・美濃加茂(48)]、飛騨[清見村(19)・飛騨(49)]、西美濃[大垣市(37)]、ぎふ(69)[岐阜市(40)・岐阜市(55)]
愛知	遠州中央(56)[熊切村(1)・井通村(2)・富岡(11)・磐田市(26)]、清水[庵原村(4)]、三ヶ日町[三ヶ日(18)]、静岡市(63)[静岡市(23)]、富士伊豆[伊豆中央(24)]
三重	あいち中央[安城市(34)]、あいち知多(59)[東知多(49)]、愛知東(62)、あいち尾東(67)
滋賀	多気郡[明和町(21)]、伊賀ふるさと[阿山町(23)]、三重北[木曽岬村(24)]
京都	甲賀(51)(76)[竜池(2)・甲南町(7)・水口町(15)・甲賀郡(51)]、北びわこ[湯田(4)]、東びわこ(54)、グリーン近江(56)
大阪	京都[京北(19)・瑞穂町(24)・亀岡市(42)]、京都市(64)、京都やましろ(66)
兵庫	高槻市(55)、大阪中河内(71)、グリーン大阪(75)
奈良	みのり[黒田庄(7)・上東条(12)]、たじま[出石(18)・豊岡市(27)・豊岡市(44)]、兵庫六甲[三田市(19)・神戸市西(23)・神戸市北(46)]、ハリマ(47)[一宮町(22)]、あわじ島[北阿萬(24)]、兵庫みらい[加西市(26)]、兵庫西[上郡町(29)]、丹波ささやま[丹波(33)]、丹波ひかみ[氷上町(35)]
和歌山	奈良県(54)
鳥取	和歌山県[粉河町(21)・紀南(45)・紀の里(52)・紀南(64)]
島根	鳥取中央(58)[倉吉市(35)・東伯町(46)]、鳥取西部[江府町(43)]、鳥取いなば(72)
岡山	島根県(67)[海潮村(5)・大東町(16)・安来市(21)・出雲市(22)・島根石見(33)・斐川町(39)・いずも(56)・いわみ中央(61)・雲南(62)・石見銀山(65)]
広島	岡山市[高松町(16)・西大寺(30)・岡山市(48)]
山口	尾道市[向東村(2)]、広島市[加計町(12)]、ひろしま[三次市(32)・三次(48)・広島北部(64)]
徳島	山口県[深川(3)・田耕(7)・安下庄(9)・秋穂(18)・菊川町(21)・下関市(27)・山口市(36)・山口宇部(49)・豊岡(53)・山口中央(63)]
香川	徳島県[桑野(9)・新野(11)]、徳島市(37)
愛媛	香川県[安田村(1)・宝山(24)・飯南(31)・三木町(44)・四国大川(48)・善通寺市(50)]
高知	松山市[余土(6)・石井村(8)]、今治立花[立花(14)]、えひめ南(53)[喜佐方(15)]、うま[松柏(22)]、愛媛たいき[大洲市(32)]
福岡	高知県[川北(10)・野市町(28)]、高知市(51)
佐賀	田川[田川市金川(5)]、筑前あさくら(63)[大福(11)]、にじ(53)[御幸(12)・田主丸町(25)・吉井町(30)]、久留米市(20)、筑紫(29)、宗像(37)、福岡八女[筑後市(41)]、糸島(51)、福岡市(58)、南筑後(72)
長崎	伊万里市[大山村(4)・南波多(10)・伊万里市(24)]、佐賀県[南多久町(6)・三日月村(15)・福富町(18)・武雄市(26)・白石地区(30)・杵島(34)・鳥栖基山(35)・鹿島市(43)・佐賀みどり(56)]、唐津[鏡(13)・唐津市(20)・上場(38)・松浦東部(47)]
熊本	長崎県(59)
大分	八代地域(76)[金剛(6)]、菊池地域(68)[泗水(8)]、熊本宇城[松橋町(29)]、球磨地域[錦町一武(30)]
宮崎	大分県[竹田市宮城(15)・臼杵市(16)]、大分大山町(39)
鹿児島	宮崎県[諸塚村(20)・西都(40)・高千穂地区(50)・延岡(67)・えびの市(73)]
沖縄	南さつま[枕崎市(7)]、種子屋久[中種子町(17)]
	沖縄県[読谷村(17)]

(注) 1. ( )内の数字は「家の光文化賞」の回次。 2. [ ]内は受賞時の組合名。 3. 受賞組合154、延べ294。